

# 社会心理学

## ◇教員◇

教授：亀田達也、唐沢かおり、村本由紀子、大坪庸介

助教：岩谷舟真 特任助教：金恵璘

## ◇学生◇

学部：45名、修士課程：12名、博士課程：6名

社会心理学は、社会的な環境の中における人々の行動と、その背後にある心的過程および社会・文化構造との関わりについて研究する実証科学である。研究対象は、社会的状況の理解過程やそれを支える情報処理過程、対人行動、集団の一員としての行動、組織における人間行動、文化的歴史的な影響過程など幅広い。社会心理学研究室の学部教育においては、さまざまなテーマに及ぶ社会心理学の基礎的知見や理論を学ぶための概論、特定のテーマに関して深く掘り下げた議論を行う講義、実証的な研究手法を学ぶための実験実習や社会調査法実習、統計学の授業が開講されている。また、隣接科学としての心理学、社会学はもとより、経済学、哲学、言語学、文化人類学、生物学、脳科学、情報科学、精神医学などの幅広い知識が役に立つことが多く、これらの授業への参加を積極的に勧めている。

研究方法論の習得プロセスは妥協を排した厳しく長い訓練を伴うが、それは学生どうし、また学生と教員との和気あいあいとしたジョイント・プロジェクトでもある。関心を同じくする仲間と知的刺激に満ちたディスカッションを重ね、心と社会に関わるさまざまな問題にアプローチすることの楽しさを、ぜひ体感してほしい。

各教員の研究領域および担当授業の概要は以下のとおりである。

亀田 達也 教授 近年の人間・社会科学では、心理学における進化的視点の受容や、経済学における進化ゲーム理論の展開などに見られるように、個体や血縁者の生き残りに対して、ヒトの認知・感情・行動がどのような役割・機能を果たすのかを考えるという研究アプローチが重要になっている。同時に人の意思決定を一連の計算としてモデル化する計算論的ア

アプローチが急速に展開している。こうした「適応のメタ理論」および「計算論」に立ち、社会・集団行動のメカニズムや成立基盤を、他分野の研究者と協働しながら研究している。現在進行中の領域交叉的な研究の例として、①社会的分配のあり方を中心に「正義」に関する哲学的な命題がどのような認知・神経基盤をもつかに関する実験的検討（経済学、脳科学、哲学・倫理学者との協働）、②集合知の発生に関する理論モデルの構築（生物学、情報科学、ネットワーク科学者との協働）、③共感性の認知・神経基盤に関する実験的検討（脳科学、神経生理学者との協働）、などがある。

授業科目では、「社会心理学概論」、「社会心理学演習」などを担当している。社会心理学演習では、社会的場面での意思決定を中心テーマに、隣接領域の研究を含む英文文献を講読しながら、私たちの行動が、他者の行動を引き起こす「原因」であると同時に、他者の行動の「結果」であるという、「マイクロ=マクロ・ダイナミクス」について理解を深める。また、こうした社会的相互依存構造とプロセスを捉える手法として、ゲーム理論や計算モデルを含む数理的アプローチについても学習する。

唐沢 かおり 教授 私たちが、自己や他者、他集団、社会的な出来事を、どのように理解するのか、その情報処理過程を扱う、「社会的認知」領域の研究を行っている。現在、携わっている研究の具体的な内容は次のとおりである。①他者が何を考え、どのような動機や意図を持っているのかを推論する「Mind reading」過程の解明、およびその過程と道徳的判断と非難、支援、赦しといった対人行動との関係について、②自由意思信念の構造の解明や、信念の強弱が自己制御や道徳的判断に及ぼす影響について、③科学コミュニケーション過程の解明とその望ましいあり方の検討、例えば科学的知見の提示のされ方と、一般の人たちの科学への理解の関係、防災など実践的な地域活動の効果の評価とその情報発信のあり方の検討。

今年度の担当授業科目は、「社会心理学実習Ⅲ」、「社会心理学演習Ⅱ」である。「社会心理学実習Ⅲ」では、研究室のプロジェクトとして行っている研究テーマを題材に、調査や実験手法について学ぶ。また、「社会心理学演習Ⅱ」では、社会的認知領域の最先端研究を取り上げ、受講者は、関連する研究論文を講読し、問題点や新たな研究の可能性についてグループで議論したうえで、その成果を発表する。卒業論文指導については、大学院生

と合同の研究ミーティングの中で行っており、計画の立案・データ収集と分析・考察を深めるための議論に、積極的に関わることを期待する。

村本 由紀子 教授 主として集団心理学・文化心理学の領域を専門とし、マイクロな個人の心とマクロな社会環境とのダイナミックな相互構成関係を解き明かすことを目指している。特に、集団規範や文化の生成・維持のプロセスを探究することに関心をもち、実験室内にミニマルな行動の連鎖を作り出すことを目指した心理学実験と、社会の現場における慣習や思考様式の変化を継時的に追跡するフィールドワークという方法論を両輪として、一連の研究に従事している。現在取り組んでいる主な研究テーマは以下のとおり：①多元的無知による集団規範の維持過程、②共有信念の文化差の規定因、③文化的慣習の社会生態学的基盤、④組織文化・風土をめぐる諸問題、など。

主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅲ」および「社会心理学演習Ⅲ」である。概論では、組織・集団・文化に関わる種々の社会現象を題材として取り上げ、社会心理学や関連領域の知見を用いてそれらの現象を多面的に読み解く。実習では、研究室において現在進行形の研究プロジェクトに受講生も加わり、研究計画の立案からデータ収集と分析、考察に至るまでの一連の研究プロセスを体得していく。演習では、心の文化差、文化的慣習や集団規範の生成・維持過程等に関する社会心理学の基本研究を概観したうえで、先行研究の限界を超えた新たな研究枠組みや方法論を多面的に検討し、理解を深める。

大坪 庸介 教授 人々の社会行動、社会的認知の適応的基盤に関心をもち、進化論的な観点から社会心理学の研究に取り組んでいる。例えば、進化ゲーム理論では、自己呈示とその知覚のような2つの現象は社会的相互作用というコインの両面として統合的に分析することができる。つまり、どのような自己呈示とそれをどのように知覚することが進化的に安定な状態になるかを理論的に検討することができる。このような進化ゲーム理論など進化生物学のモデルを取り入れつつ、近年は①謝罪の正直さに関する研究、②評判にもとづく協力システムの維持に関する研究、③幼少期の経験による生活史戦略の調整に関する研究等を行っている。

主たる担当科目は、「社会心理学概論」、「社会心理学実習Ⅰ（心理学実験）」、

「社会心理学実習Ⅱ（社会心理学調査実習）」、「社会心理学演習」である。社会心理学概論では社会・集団・家族に関する心理学的知見を概観する。社会心理学調査実習では、生成した研究仮説にもとづく調査票の作成、データの収集・解析、論文や報告書の作成に至る社会調査のプロセスを学ぶ。

最後に、卒業生の進路は、大学院の他、民間企業、情報産業、官庁など多岐にわたっている。社会心理学を学ぶことで身につけたデータ分析の考え方や問題解決への道筋は、将来どのような進路に進む人にとっても、役に立つものとなり得るだろう。